

いわかづみ

令和二年十二月 第八三号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(2)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑩オケ)
- ◇ 方言一考(まぶらかす)
- ◇ もの言うもの(柴橋)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(2)

金俣小川用水と前田三作

渡辺伸栄

山紫水明と言えば関川村の代名詞。この景観、自然創造主だけの産物ではなく、我らが先人の営々と刻んできた造形物でもありましょう。そんな思いを込めて、前号から新連載を担当しています。よろしくお願ひします。

さて、我が村の景観と言えば、何を置いても川沿いの平地に広がる美田。そこには開田と用水の格闘が秘められています。

牟礼山の頂から

胎内市と関川村の境界線上に牟礼山という面白い名の山があります。ムレはモレに同じで、

モリからの転訛と言われ、モリは土地の盛り上がった所、つまり山です。登山道は胎内市黒俣地内にあつて緩やかな斜面の山ですが、標高616mの頂に立てば、関川村側は急激に切れ落ちた谷になっています。

山頂に立つて北方を眺めると、光兎山・頭巾山・鷲ヶ巢山、それに晴れた日は朝日連峰の以東岳まで見えて、それらをバックにした大石川の流れと兩岸に広がる田園風景に魅了されます。中でも目を惹くのは、金俣・鮎谷の河岸段丘上に広がる美田です。(写真①)

水利の悪い高位段丘上にこれだけの田を開くには、用水の苦労は並大抵ではありません。

金俣小川用水の碑

大石川沿いを通る県道が金俣集落を越えて、坂道を上り河岸段丘面に出た所、林に入る直前、道の左側に「金俣小川用水記念碑」と大書された石碑が建っています。(写真②)



<写真②>

車を降りて、碑の上で遊ぶ猿たちにどいてもらって裏面を読むと、次のようにあります。

昭和十八年八月二十二日工事に着手
二年十ヶ月の歳月を得て昭和二十一年六月十日に通水完成する

用水工事に従事した人

前田三作 高橋時太郎 高橋金作

高橋貞次 阿部寅三郎 高橋時三郎

高橋 実 前田七三郎 加藤康一

高橋吉作 加藤万作

農民の水との戦いの記録小冊子も右近次男氏執筆の努力に依り完成しこの用水工事に鋭意努力された諸氏の功を讃え



牟礼山山頂から 2019.12.22

<写真①>

子々孫々まで伝い継がれる事を願うこの碑に
刻み後世に残す (以下、発起人略)

この碑から高度差60mほど下方に大石川の
支流・小川が流れています。標高170mの碑
のある地点から、およそ4km小川をさかのぼる
川岸に水路を掘り、標高280m程の地点から
水を引き入れたのが、碑文の金俣小川用水です。
引き入れ口は、ちょうど牟礼山山頂直下の崖
の下辺りになります。

右近次男氏の小冊子

昭和37年、安角小学校に赴任された右近次男
氏は、在勤中に金俣小川用水と開田の苦労を知
り、「農民の水との戦いの記録 金俣用水」と
題した冊子を執筆されました。

右近氏のこの著作を読むと、用水と開田に携
わった人々の苦労がひとと伝わってきます。大
戦末期と終戦直後のこと、それだけでなく大変
な時代に、様々な困難に打ち勝って成し遂げた
偉業であったことが分かります。とりわけ、こ
の事業のリーダーだった前田三作の苦労は、
「金俣用水生みの親 前田三作氏について」と
項を起こして特記されています。

村上からのダイナマイト運びは160回余
に及び、とりわけ昭和20年の大晦日は大雪で、
村上町から12kg余のダイナマイトを担いで、列
車の止まった線路伝いに夜通しかけて歩いて
運んだという逸話は壮絶なものがあります。

詳細は、ぜひ同冊子をお読みください。歴史
館にもありますので。

白米を求めての格闘

かつて、我らの先人が白米へ懸けた願いは、
現代人には想像外のものがあるように思いま
す。

山中に古道を探していると、沢沢に廃田の跡
があります。斜面を切り開き、湿地を耕し、沢
の上流を辿って水を引き込んで作った田。名も
なき人々の格闘の跡と言うには、あまりにも申
し訳ないような気がしてきます。規模の大小を
問わず、それらすべての人々が前田三作だった
のではないのでしょうか。

記録もなく記憶からも消えていく格闘。右近
次男氏の冊子は、多くの格闘人への惜しみない
賛歌です。

民具が語る生活史

民具⑩ オケ(桶)

こちらは、東桂苑に保管されていたオケ(桶)
です。底板が外れています。他はしっかりと
した作りです。家印から、本渡邊家か、東桂分
家で使われていたものと思われます。

オケは、円筒状の木製容器の総称で、漢字で
は桶や槽の字をあてます。現在、オケといえは、
短冊状に割削った板片(樽(くれ))を円形状

に並べ、竹の箍(たが)で締め、底板を付けた
結桶(ゆいおけ)が頭に浮かびますが、結桶は
中世以降の産物で、古くは曲物(まげもの)製
の桶が主でした。



写真(上) オケ全体



(下) 底板

結桶の特徴として、樽(くれ)、底板、箍(た
が)といった部品を組み合わせる容器に仕上げ
ていく点が挙げられます。樹齢百年ほどの杉や
桧を二カ月ほど乾かして、材を取りました。部
品が破損した場合、それを取り替えることで長
く使えるものとなり、同じ規格で部品を作れば
同容量のものが容易に作られるので、分業シス
テムを導入し、ある程度の大量生産が可能にな
ったようです。さらに、この特徴を活かすこと
で大きな容器の生産も可能になり、近世以降、
酒、醤油、味噌樽などの醸造業の発展に大きく
貢献しました。

また、日常生活の中でもオケは用途が広く、
洗面盥(たらい)、洗盥、飼葉桶、飯櫃(めし
びつ)、おかもち、手桶、味噌桶、醤油桶など、
まさに生活に密接した道具でした。そのため桶
屋は各地に必要な職種であり、新しい桶を作る
だけではなく、壊れた部分の修理も大事な仕事

でした。

今回写真で紹介したオケは、底板に「醤油用
（一）桂 大正四年」、手のところには「乙卯
元旦」「若水」と書かれています。きつと大正
四（一九一五、乙卯）年に作られ、醤油用に使
っていたのでしょうか。では一体「元旦」「若水」
とは何のことでしょうか。

全国的に、元旦に主人や長男を「年男」とし
（干支の年男とは別です）、「若水（桶）」と書か
れ持ち手を若松で飾った桶で、一年の初めの水
を汲む習俗がありました。川、神社の清水、井
戸水などに手を合わせ、拝んでから水を汲みま
す。汲んだ若水と塩で塩水を作り、神棚、囲炉
裏から各部屋を清め、清めた炉に若水を入れた
鉄瓶や鍋を火にかけ、若水の湯で家族全員が顔
を洗ったり、茶をたてたりしました。一年間の
健康を願った年中行事のひとつです。これを若
水汲み、若水迎えといいます。関川村でも昭和
40年頃まで、多くの家で行われていました。

先祖が元旦に家族の一年間の健康を願って
水を汲んでいたと思うと、このような世情なの
でひとしお感慨深いものがあります。どうぞよ
いお年をお迎えください。（田村舞子）

参考文献 佐久間惇「他編一九八六『関川郷の民
俗』関川村教育委員会、日本民具学会編一九九七

「桶（おけ）」『日本民具辞典』ぎょうせい出版、

柳田國男監修一九五一『民俗学辞典』東京堂出版

方言一考・まぶらかす

「まぶらかす」は自慢げに見せびらかす、と言
う意味で「啓介少年は河原の大石の上に座って周
りに集まった仲間新しいヤス（魚を突く道具）
を大いにまぶらかした。五本又のヤスの先端はこ
れから始まる夏休みの成果を保証するように午
後の日差しに輝いた。そして、仲間の誰かが鱒を
突くのを見たり、獲った話を聞いたりする度に少
年はより深く、より長く獅子舞岩の淵を潜ったが、
啓介少年の新しいヤスに突かれる鱒はどうとう
この夏一匹も無かった」というような使い方をす
る。この言葉、関川村でも全地域で使われていた
わけではないようで、霧出の人は知らないと言っ
ていた。ちよつと調べた限りでは同義で使われて
いるのは鳥取県だけのようだ。「まくれる（転ぶ）」
「まめ（達者）」「よばれる（御馳走になる）」など、
鳥取県と同義で残っている方言は他にもあって、
柳田國男の「方言圏論」を裏付けるものだと田
村（舞）さんが言う。さて、その語源だが「まぶる」
という古語はあっても「守る」とか「塗る・まみ
れる」とかいう意味で「見せびらかす」からは遠
い。他に「まみゆ」という言葉もあって「対面す
る」「見せる」と書いてある。これの転嫁はやや
苦しいが「まぶらかす」の「ま」が「目」から来
ていることは確かな気がする。

少年はその後大過なく半世紀を生きて今道の

駅辺りを徘徊する。あの夏以来何ひとつまぶら
かす物なく、ひさぐ物なく、今後もそうして生きて
いくだろう。ヤスの話はそんな今の姿から逆算し
た想像である。（安久）

もの言うもの・柴橋

ある程度の長期間にわたって架け替えが必要
ない橋を永久橋という。つまりコンクリートの橋
のことだ。関川村史巻末の年表には昭和十年に温
泉橋が永久橋になったとある。温泉橋が村で最初
に永久橋になったのは温泉が戦前にかに賑わっ
たかの証拠であろう。当時関谷女川両村合わせて
も自家用車は十台と
なく、トラック数台、
しかし自転車は七百
数十台と多く、運搬、
移動は徒歩、牛馬車、
荷車、リヤカーなど
が主な手段で、洪水
や木材の腐朽で架け
替えが必要になった
としても木橋で十分
であったのだろう。
歴史館に木橋より
も以前の形の「柴橋」
の模型がある。



朴坂の佐藤太郎氏が作られたもので、橋桁等の骨格は杉などの丸太だが、通路がマンサクの柴で編んでいるので柴橋といわれている。橋桁が「牛ワク」と呼ばれる木の組物で保護されているのも特徴だ。柴橋に係る文書や設計図は見つかっていないから、この模型は口承に替わる貴重な資料となるだろう。荒川本流ほど川幅の広くない女川にはいくつもの柴橋があつたそうだが、大水が出れば流され、その度架け替えたそう。私の曾祖父は上新保と蛇喰の間に懸けられた柴橋を馬に乗って渡る際、馬もろとも川まで落ち、その時の怪我が原因で死んだと故高橋重右エ門先生からお聞きしたことがある。常に腰に軍刀を提げて馬に跨り大いに威張っていた風で、落馬して川まで落ちたことも面目なかつたろうが、季節がいつであつても大変痛かつたろうと同情する。(安久)

歴史館行事の報告

○良寛の歩いた峠を越えて

今年度最後の峠歩きは、**萱野峠・朴ノ木峠**でした。
(十月十一日(日))、
総勢二十五名)



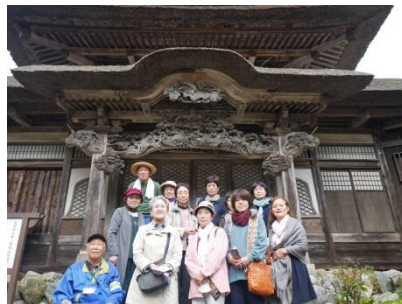
○秋の健康登山

長井葉山
(一一三七m)、
朝日連峰南端、
朝日軍道の残る山に登りました。
(十月十八日(日))、
総勢三十名)



○秋の美術館巡り

石川雲蝶の代表作が残る、魚沼市永林寺・西福寺を訪ねました。
(十月二十六日(月))
総勢三十四名)



○初心者のための山登り

登山を始めた初心者、体力に自信のない方を対象に、ゆっくりと時間をかけて高坪山(五七〇m)に登りました。
(十一月三日(火))
総勢十六名)



○登録文化財「平田大六家住宅」見学会

平成十一年に国の登録有形文化財に登録された平田大六家住宅を平田氏の解説で見学しました。
(十一月十四日(土))、
総勢四十二名)



お知らせ

○村民ギャラリーで「新春公民館書道作品展」を開催します。1月5日(火)から1月31日(日)まで。村民を中心とした小学生から大人の作品展です。2月6日(土)からは「私のコレクション展」を開催予定です!

○花と山、スライド解説会を開催します。今年度行われた健康登山の様子、眺望、咲く花々、写真を見ながら今年登る山に夢を馳せましょう。とき：1月17日(日)、13時半～15時半、会場：村民会館休養室、参加費：無料、講師：阿賀北山岳会会員、申込先：当館

○年末年始のお休み 12月28日(月)～令和3年1月4日(月)です。

◎ご来館、ご参加お待ちしております。

いわかがみ

第八三号
発行日 令和二年十二月
編集発行 せきかわ歴史とみちの館
tel:0254-64-1288 Fax:0254-64-0300